ロアルド・ダール『キス・キス』

アイデアによらない人間のクロニクル

参照
叫↓座 七四
記↓あらすじ 六
目録集
著作 二六
映像／基 六九・ヒ 七六
訳解／元 八四・改 八七・新 八八

本作を読んで、ふと懐かしさを感じた。初読なのに、である。

ミステリ、SF、ホラーとジャンルの枠に縛られることのない、自由奔放な作品の集まり「異色作家短篇集」のなかでも、本作は実は浮いた存在かもしれない。何故なら、基本的にどれもジャンル横断のない普通の小説だからである。例外といえるのも、「女主人」と「ローヤルゼリー」くらいではないだろうか。このため、本作はこの叢書のなかでも個性が埋没しがちだが、逆にアイデアに依存しないことでダールの筆致の上手さがよく現れている。

ダールの作品で描かれるのは、あくまで人間なのである。心の奥に潜む他人への嫌悪感、あるいは思いやりの念、私欲、ちょっとした冒険心など、誰もが覚えのある人間の細かい機微が、諸短篇で鮮やかに綴られている。読後懐かしいと感じたのは、物語自体に見覚えがあったからでない。普段客観視することのない自分の心情を、この作品の奥に見出してしまうからなのだ。奇抜な設定を用いない、現実と地続きの作風のため、それを強く再認識させられてしまう。

また、人間の持つ感情がその年代を通して描かれている。幼年期は好奇心が強い（「豚」）。どこにも知れぬ場所を彷徨う青少年は自分探しの旅か？（「女主人」）。少年期への回顧を思わせる青年は悪戯心からちょっとした冒険を（「ほしぶどう作戦」）。夫婦は子の成長を強く願う（「誕生と破局」「ローヤルゼリー」）。しかし中年夫婦になれば、二人の仲も良いとは限らず（「天国への登り道」「ビクスビイ夫人と大佐のコート」）。登場人物の年代ごとに並んでいるわけではないが、一冊の短篇集の中で人間のクロニクルを描いたかのようなユニークな体裁だ。

あるいは、これをダールのクロニクルと見ることも可能かもしれない。だって、この作品集を発表した時、ダールは五十台半ば。老人の話がないのも頷けるじゃありませんか。

（土岐）

クロス・レビュー

人は異常を怖れる。だからホラーに登場する以上は進化し続け、そこにおいてはダールは時代遅れだ。しかし、ダールが描く異常は、主人公の身近な存在をも取り込む。自分だけが置いていかれた孤独、その恐怖が古びることはない。個人的ベストは「天国への登り道」。

（埃及）

個人的には、全く救いようがなく悪意に満ちた語りの「豚」が最高。ランジュラン「蝿」を別視点で作り直したような「ウィリアムとメアリイ」や、展開が予測不能すぎてよくわからない「ジョージイ・ポーギイ」も、世評は低いけど（？）好きです。

（孔田）

【未読】ダールといえば、「チャーリイとチョコレート工場の秘密」だ。映画の素晴らしさは神がかっている。小説も面白いけど、映画の方もぜひ見よう！　ちなみに、映画は未見だし、『キス・キス』も未読。『あなたに似た人』（ハヤカワ文庫）は読んだけどあまり好きじゃなかった。ははは。

（戸羽）

コラム　《異色作家短篇集》と映像化

《異色作家短篇集》の作家たちの映像化リストをまとめてみて、感じたところを少し。

リストを見ると、刊行開始の六〇年一二月までに、ほとんどの作家に原作映像化、もしくは脚本担当があり、そのいくつかが既に日本に入っていることがわかる。

「蠅男の恐怖」など、本邦での紹介が遅かった作品もあるが、「サイコ」「レベッカ」「虹を掴む男」「原子怪獣現わる」などの名作は、刊行までにすべて日本で公開されており、この短篇集の作家たちは、読者にとって必ずしも未知の存在ではなかったと言える。

また、「ヒッチコック劇場」「トワイライトゾーン」と異色作家の関係も深い。

「ヒッチコック劇場」は、提供された原作の多さもさることながら、当時映画化が少なかったダールやブラウン、コリアが、脚本で参加している（なかには、ダールとブロック、エリンとブラッドベ

次の頁へ続く

ロアルド・ダール（Roald Dahl）
１９１６／９／１３～１９９０／１１／２３
南ウェールズ生まれ。第二次大戦中の空軍パイロット経験を活かした短篇「簡単な任務」でデビュー。１９５４年『あなたに似た人』、１９６０年「女主人」でＭＷＡ短篇賞を受賞。１９５３年に女優パトリシア・ニールと結婚（後に離婚）。子供たちへの寝物語を本にした『チョコレート工場の秘密』（１９６４）などの児童書でも知られる。♂。